

という宿泊施設が予約出来た。

これまでのパターンであれば、初日に絵画を観賞して、翌日は何処かの山へ、ということであるが、行くまでの時間もかかることから、大町山岳博物館を訪ね、そこからの北アルプスを眺めることは残念ながら諦めた。山旅号組は、ロッジ山旅のギャラリー観賞のち、長沢さんのガイドでハイキングとした。実際の場面では、霧ヶ峰ビーナスラインのドライブとなった。こちらは横関さんの報告をお読みいただきたい。

レンタカーは3人ということになって、松本で借り、信州大学近くで田村さんをピックアップしたのち一路北アルプスの展望を求めて光城山を目指す。さすがに地元の田村さんはよく道をご存知でナビゲートしてくださる。会期中何度も車で現地へ通っている中村さんに、このルートは渋滞もなく最高！と言わしめた。途中から右上に上がると、アッという間に光城山の稜線に着いた。少しくらい歩かなくてはと、展望の良さそうな場所へゆるゆる登る。小屋のある場所は山が望めなかったのので古峰神社へ向かうと、幸い常念岳方面が眺められた。

実は松本へのあずさ車中から、笹子辺りまではガスに覆われていて山が見えなかったのに、笹子トンネルを抜けると期待通りぐんぐん青空となり、鳳凰三山や甲斐駒がくっきりと見えた。ただ天気は下り坂で、夜には雨の予報となっていた。それでも山が眺められたのは幸いだった。山旅号とは最終的に田淵行男記念館で合流することとしていたが、山旅号との連携担当の横関さんから、コハクチョウの飛来する場所が3ヶ所あって、そのひとつの犀川白鳥湖に行くとの連絡が入った。ではそこに向かおうと長峰山をかすめて下り、犀川の河原に到着すると既に山旅号は来ていて、「いやいや奇遇ですな」などと言って合流を喜び合う。だが暖冬の影響か、残念なことに白鳥は来ていなかった！少し時間は早い田淵行男記念館へと移動する。記念館が初めての方もおられたが、担当の方から「普段はお見せしないのですが」と言って、ドラマの撮影の時の写真パネルを見せていただいた（1975年のNHK連続ドラマ「青空の時」主演大竹しのぶ、田淵行男役は米倉斉加年）。



会場で中村さんを囲んで。左から岩佐館長、中村好至恵、田村佐喜子
後列左から、荒井正人、島田稔（この後ろに福田光子さんが隠れていた！）、
富澤克禮、長沢洋、川口章子、渡部温子、横関邦子、岡田陽子、鳥橋祥子、
右端は信濃支部の古幡開太郎さん

さらに田淵行男手作りの貴重なアルバムも見せていただいた。この期間には階下のフロアで、田淵行男賞を受賞された澤井俊彦さんのツキノワグマ写真展が行われており、よくこんな写真が撮れるねと、感嘆しきりであった。記念館の「友の会」会長である、信濃支部の古幡開太郎さんには事前に訪問をお伝えしてあったが、少し早く到着したので、記念館ではお会い出来ず、宿

泊地のビレッジ安曇野にわざわざおみえいただき恐縮した。夕食ののちテレビの選挙速報も見ながら幹事部屋で少しお酒も飲んで懇談したが、そうこうするうち、寝る頃には、とうとう外では雨音がし始めた。

翌日はゆったりと朝食を摂り、小雨の中、この旅のメインである安曇野山岳美術館へ向かう。この周辺の自然に溶け込んだかのようなたたずまいの美術館で鑑賞する中村さんの山の絵は、街のギャラリーで見るとはひと味違った感動をもたらしてくれる。田村さんのお嬢さんも時々お手伝いされている美術館で、岩佐館長はじめ皆さんのご好意で、静かな豊かな時間を過ごすことが出来た。古幡開太郎さんも来ていただき、自宅の庭で採れた柿を沢山お持ちくださったので、皆で分けてお土産にさせていただいた。常設ギャラリーもじっくりと鑑賞し、中村さんの絵葉書や、ウェストンの似顔絵を浮き彫りにしたビスケットなど、お土産も買い込んでお世話になった美術館を後にする。平野さんは先に帰宅するため、長沢さんが穂高駅まで送って行くことになり、慌ただしく車に乗り込んで行かれた。もっと早く集合写真を撮ればよかったと気づいた時にはもう後の祭りであった。

近くにある日帰り温泉施設の食堂で、めいめい好きなものを食べて解散とした。雨には降られたものの、何とか山も眺められ、晩秋の安曇野を楽しむことが出来た旅となった。

(報告：荒井正人 写真提供：中村好至恵)



先に帰る平野さんを皆で見送る

安曇野 秋の旅行

横関 邦子

参加メンバーは、それぞれ新宿、立川、甲府から新宿発 7 時のあずさ 1 号に乗り、小淵沢まで。小淵沢駅ではこれから 2 日間山旅号で運転・ガイドをしてくださるロッジ山旅のオーナーの長沢さんと、ロッジ山旅に前泊した福田さんが列車の到着を待っていてくれた。参加メンバーの内、荒井さんと中村好至恵さんは松本まであずさで行き、松本で田村さんと合流し、レンタカーで移動予定。そんなわけで、1 日目は 10 名と 3 名の 2 グループに分かれたが、総勢 13 名での行動となった。



霧ヶ峰にある東屋で昼食
(右が集合写真で隠れていた福田光子さん)

山旅号に乗った 10 名は、まずは客室をギャラリーに改装したロッジ山旅まで、木々に囲まれた細い道を通り 30 分弱で周囲の木々が紅葉し、落葉して秋らしい風情の静かなロッジに着いた。ウッドデッキにも落ち葉が重なり、秋が深まっている感じであった。

3 つの部屋に分かれて飾られたそれぞれの作者の山の絵や窓の外の秋の様子やカーテンの間から漏れる陽の光を見ながら、絵の話をし、コーヒーを飲みながらみ

んなで語り合っただけで芸術の秋に浸った。こんな時間は心地がよくいつまでもそこに留まっていたい感じだったが、この日はレンタカー組と合流し、松本の田淵行男記念館に行き、隣にある宿泊地のビレッジ安曇野まで行く予定で、後ろ髪をひかれながら出発。

松本まで岡谷で渋滞にはまる可能性があるとのこと、長沢さんは霧ヶ峰経由の道を選んでくれた。ゆったりとした起伏のある丘陵の間を通るビーナスラインを移動しながら、青く広い空と紅葉の始まっている山々の木々や草紅葉を眺め、雄大な霧ヶ峰の景色を楽しんだ。途中東屋のある場所でコンビニに寄って入手したおにぎりなどのお昼を取り、松本までの道を進んだ。遠くに山並みが続く、木々の紅葉も進んでいて、赤や黄色の葉が緑の葉と混ざって美しかった。移動中の山旅号の中は、シーンと静まることなく、みんなの話声がかわるがわる聞こえ、紅葉の一番のスポットですよと長沢さんの説明に「わーきれい」とにぎやかに過ごした。

霧ヶ峰コースを選んでくださったことで、素晴らしい景色を見ることができたし、早めに松本に着くことができた。そこで犀川の白鳥湖に寄ることにし、レンタカー組に連絡し、合流した。時期的にちょっと早かったか、温暖化のせいで白鳥の出発が遅れているのか、白鳥には会えなかったが、トラックの荷台が白鳥の観察室になっていて、白鳥からは人が見えないように壁を立て、窓から外が見えるようになっていた。去年の収穫で古くなったお米や、余った(?)高野豆腐などが置かれ、近辺の人達が白鳥を大事にし、餌を寄付している感じが見えた。次の目的地の田淵行男記念館に向かう途中、まだ灰色がかった成長途中の白鳥が飛んでいた。この時も「あっ、白鳥」とにぎやか。

山岳写真家、高山蝶研究家の田淵行男の記念館に着き、ここではカラーフィルム登場以前、チョウの美しさを図鑑に残したいと細密画で描いたという絵や普段は展示していない貴重な資料も見せていただいた。また地下1階に澤井俊彦氏が撮影した森に生きるツキノワグマの写真が展示されており、熊たちが森で暮らすその生態が生々しく写され、自然の中で生きる熊の迫力に目を奪われた。でもその目は小さくて優しく、今あちこちで人間に邪魔にされている熊たちの悲しい目にもみえてしまった。

翌日は朝から雨だったのでゆっくり出発し、安曇野山岳美術館では中村さんの絵をたっぷり鑑賞することができた。中村さんの山の絵を見ると、いつもまた山に行きたい気持ちになる。外は小雨が降っていたが、かえって木々の緑や紅葉を美しく見せてくれたようにも感じた。

小学生のころ、母の実家の豊科で長い夏休みを過ごしていたが、そのころ周りは広く緑の田んぼが続く、松本盆地の遠くの山々に囲まれ自然がいっぱいだったように思う。今の安曇野は博物館や美術館など芸術と観光の場所が変わってしまったようだ。でもまた違う季節に訪れたい場所である。絵が描けたらいいなあと思いながら。

(写真撮影：横関邦子)



Sawai Toshihiko
澤井俊彦写真展
熊の記憶
9月10日(火) ▶ 12月1日(日)

田淵行男に続く自然科学系の写真家を発掘することを目的に始まった『田淵行男賞』、第5回の最高賞を受賞した澤井さんの作品展です。田淵はモノクロからカラーへと時代が変わる中、山岳写真をまよしながら『高山標』といった生態のカラー写真にも活躍を見出していました。撮影の自由度がモノクロよりも勝っていたからです。同じく、フィルムからデジタルに変わる中で澤井さんは被写体として「ツキノワグマ」に出会います。デジタルの利点を生かしつつも、フィルムで培った繊細な表現構成や、気の遠くなるような時間を費やして切り取られた現場感の漂う作品は、まさに田淵に続く作風を感じさせます。澤井さんの受賞後の軌跡をたどる新作作品展と、受賞作品の一部を展示します。

田淵行男記念館の展示案内パンフレットより

日の出山から金毘羅尾根を武蔵五日市へ下る

石塚 嘉一

実施日：2024 年 11 月 27 日（水）参加者 5 名（後掲写真参照）

ここ数年、晩秋の奥多摩散策を石井会員のガイドで実施してきたが、今年は奥多摩の山歩きをすることにになった。

青梅線の電車が御嶽駅に近づくと、早朝まで降った雨のため、左側の山々の中腹あたりまで霧が立ち込めていて、雲海に浮かぶ高山のような幻想的な風景を見せていた。ケーブルで御岳平に上がるとすでに栗城さんが待っていた。この日のメンバーの中で健脚の栗城さんは、今回もケーブルなど使わずに古里からの登山道を登ってきたのだ。御岳平からは、晴れた日は、筑波山や日光白根山、男体山まで見えるのだが、この日は霧で何も見えない。

すぐに歩きだして、急な参拝道を上がり、神代ケヤキの手前で日の出山へのルートに入る。武蔵御嶽神社への参拝は今回はパスして先を急ぐ。吉川英治や川合玉堂など多くの文人がかつて利用した旅館山楽荘（いまでも御師の宿坊でもある）の脇の山道を下ってまた登り、まだ新しい白木の鳥居のある、日の出山への道と上養沢への分岐に出る。ここは御嶽神社への中世からの参拝道の一つだったのだ。養沢への道を分けて、大きな岩がところどころに飛び出ている広めの山道を 30 分も行くと日の出山山頂直下に着く。神代ケヤキから 1 時間ほどだ。

山頂（902m）からの富士山や雲取山を期待したが、ここでもまだ霧や雲が晴れないで、いま来た向こう側の御岳山もよく見えない。あとから登ってきたグループの女性にシャッターを切ってもらって記念写真。時間もまだ早いので、弁当は、三角形の美しい麻生山でとることにして、休憩もそこそこに、急で滑りやすいざれた道を下った。

つるつる温泉への分岐で、麻生山へは右の金毘羅尾根道へ入る。ガスで山道も、すぐ先に行く栗城さんと鳥橋さんがかすんで見える。麻生山を右へ巻く登山道と、左へ白岩の滝に行く分岐のすぐ上が麻生山の山頂（794m）で、ここにはすでに数人のグループが食事をしていた。さらに数人のグループが、我々と同時に登ってきたが、みんな期待した展望はここでも全くない。急いで昼食をすませ、また歩き始めることにした。

数年前まで、何回も秋に来たときは、遅くまで赤い実を付けたツルリンドウなどが見られたのが、今回は秋の草花も紅葉も見られない。この夏の異常気象のせいかなと話し合った。

山頂から、さっき上ってきた登山道にもどらないで、真っ直ぐ急勾配の岩場を苦労して下ると 20



左から、石塚嘉一、小林敏博、荒井正人、栗城幸二、鳥橋祥子

分ほどで、巻き道（登山道）に合流した。ここから、金毘羅尾根の細い道を下る。15分ほどでタルクボノ峰の札がある。そこを巻いてさらに10分ほど下ると左にあきる野の幸神（さじかみ）への分岐があり、その先が開けている。このころになると、晴れて来て、紅葉した白石山方面がよく見えるので初めての展望をしばらく楽しんだ。（下の写真）

元の道に戻り、両側が植林と自然林が混ざった薄暗くておもしろくない道を、前はもっと明るい尾根歩きだったのになと思ひながらひたすら下る。南沢山、あじさい山への道を分け、やっと尾根の右側、戸倉城山や十里木方面が開けたところに出た。幸神への分岐から1時間ほど歩いたことになる。明るい尾根に出て気をよくして、ペースを上げるとすぐに、十里木に下りる星竹林道の上を渡り、間もなく金毘羅山（468m）に、そしてそ



の隣の琴平神社に計画書の時間ぴったりに着いた。神社から参道を下り、檜原街道に出て武蔵五日市駅で出発2分前の電車に乗って、拝島で反省会、互いの健脚ぶりを称え合った。歩行時間5時間半の行程を計画通りに歩き通した山行であった。（写真撮影：石塚嘉一）

行程：御嶽駅9：00⇒（バス）⇒滝本⇒（ケーブル）⇒御岳平9：30→神代ケヤキ→養沢・日の出山分岐→10：50 日の出山頂上 11：00→つるつる温泉・金毘羅尾根分岐→11：55 麻生山 12：20→12：55 タルクボノ峰→13：05 幸神への分岐→14：05 南沢山・あじさい山分岐→金毘羅山・琴平神社 14：40→15：40 武蔵五日市駅

忘年会報告

開催日：12月14日（午後零時～）、参加者：12名（写真参照） 於：三平酒寮新宿西口店

今回は新宿のいわゆる居酒屋にて開催した。市ヶ谷にこだわる理由もないが、場所や会場など、皆さんのご意見も聞いて今後の開催の参考にしたい。

新入会の小部さんが出席したので、皆さんからの近況報告では自己紹介も含めて話していただいた。小部さんは熱心にメモを取っておられた。

今後の暑気払いなどのあり方を模索する中での開催であり、講演会とのセットなどもう少し工夫していきたいと考えさせられた忘年会であった。

（写真撮影：石塚嘉一）



左列手前から：島田稔、松本恒廣、川口章子、石塚嘉一、高橋清輝
中央列手前から：近藤緑、川嶋新太郎、平野紀子、夏原寿一
右列手前から：荒井正人、富澤克禮、小部正治

